

2018年3月期上期 決算説明会 質疑応答

2017年11月9日に開催した決算説明会における主な質疑応答は下記の通りです。なお、記載内容につきましては、ご理解いただきやすいよう一部に加筆・修正をしております。

Q1：通期の業績予想を据え置いたが、下期の業績に影響を与える可能性のある要因は？

A1：止血デバイス「アンジオシール」を生産するプエルトリコ工場の出荷開始時期が不確定要素と考えている。年内の出荷開始を目指し、自家発電機を使用して11月から一部生産を開始したが、電力供給が不安的な状況で、本格稼働できる状況になるまでには、まだ時間がかかると見ている。仮に今年度中に出荷ができない場合でも、通期の業績予想は達成可能と考えている。

Q2：アンジオシールの在庫はどの程度あるのか。プエルトリコから米国本土へ避難する住民が増えているとの話も聞くが、生産再開に向けて影響はあるか？また、下期の業績に対する影響は？

A2：生産を停止した時点で、約1.5カ月分の在庫を持っており、販売量を調整しながら供給を続けている。お客様には、仮に年内に出荷を再開できたとしても、供給できない期間が出てしまう可能性がある旨をお伝えしているが、自然災害なので一定のご理解を頂いている。幸い現地の従業員は全員無事であり、できるだけ早く出荷を再開できるよう尽力していく。災害による建屋・設備等の物損額は約3億円程度と見ている。修理に要する費用と、出荷停止に伴う機会損失額を保険会社に請求するが、審査および交渉に時間を要するため、保険金の受け取りは来年度以降となる見通しである。

Q3：期初予想では、2017年度の営業利益予想額の前期比増減要因で「売上増による粗利益の増加」が175億円との説明があったが、上期で既に173億円となっている。この金額の内、買収による影響額は？

A3：期初予想では、買収の影響額のみを切り分けて出しており、各増減要因には買収の影響額を含めていない。買収した事業の統合が進み、経費を正確に切り分けることが困難となったため、第1四半期および上期の決算説明会資料では、買収の影響額を切り分けて、各増減要因に含めてお示ししている。上期の売上増による粗利益の増加173億円の内96億円、粗利益率改善効果54億円の内20億円が買収の影響額である。

Q4：ニューロバスキュラー事業の粗利益率は高いと思われるが、事業全体の収益率は心臓血管カンパニー全体の利益率よりも高いのか？現在は、新製品開発のための研究開発投資を積極的に行っている時期と思われるが、投資を回収し、収益性向上に貢献するタイミングは？

A4：ニューロバスキュラー事業の粗利益率は高いが、研究開発投資に加えて販売やトレーニングなどにかかる費用も大きいと見られるため、現時点での事業利益率は、心臓血管カンパニーの事業利益率よりも低い水準である。今後も高い市場成長率が見込まれるため、引

引き続き成長投資を継続するとともに、製品毎の収益マネジメントを徹底し、事業全体の収益性を着実に向上させていく。

Q5：脳動脈瘤塞栓用デバイス「WEB」の評判は？

A5：買収後により径の細い製品を新たにラインアップに加え、欧州での限定販売を開始した。細径化により適用可能な症例が増え、ユーザーからの評判も良い。第3四半期以降、販売先を拡大し、売上を伸ばしていきたい。米国でも、2019年度の販売承認を目指し、臨床開発が順調に進捗している。

Q6：ホスピタルカンパニー、血液システムカンパニーの事業利益率は前期比で改善が進んでいる。ホスピタルカンパニーでは、低収益事業の縮小やアカウントの整理など収益重視の施策が目立つが、引き続き収益改善を重視した事業運営を行っていくのか？

A6：ホスピタルカンパニーの売上の内、約8割を占める日本の市場成長率が低いため、高い売上成長率は期待できない。引き続き収益マネジメントを徹底しつつ、アライアンス事業など、売上拡大が期待できる事業を中心に成長に向けて舵を切っていく。一方、血液システムカンパニーでは、売上成長を図ると同時に収益性も改善させていく。

Q7：最近の買収案件は、統合後の早い時期から収益貢献しているようだが、買収後の統合ノウハウが蓄積されてきたと理解してよいか。今後の買収では、早期の収益貢献が見込める案件を増やすのか？

A7：案件により買収の目的が異なるため、必ずしも早期に収益貢献する案件ばかりを対象とする訳ではない。これまで様々な分野・規模での買収を行ってきた結果、テルモグループに適した案件の選択や買収後の統合ノウハウを蓄積できたことが最大の成果と考えている。

以上